

港 湾 流 通

[港湾研究シリーズ⑩]

北見俊郎, 柴田悦子, 喜多村昌次郎
 徳田欣次, 山本和夫, 和泉雄三 共著
 河越重任, 荒木智種, 山村 学

市 来 清 也
 (日通総合研究所)

1. はじめに

わが国経済の高度成長に伴い、港湾における流通過程の合理化は、協同一貫輸送など物流革新の名によって表現されるように、急速に進展してきている。すなわち、生産過程における合理化の高度化に続き、流通コスト削減による消費の可能性増大と生産の存続拡大をはかるため、流通過程の合理化が、資本の論理に従って、近年きびしく要請されてきており、それが港湾流通においてとくに顕著となってきている。

このような流通合理化過程における港湾の最近の特色は、物的流通の量的拡大と輸送の質的向上としてとりあげられるが、それは反面、港湾における国家政策と重化学工業資本または特定利用者資本との結合による流通関係施設の開発整備、その専用化となつてあらわれており、港湾流通の民主的あり方をめぐり種々の課題を提起している。本書はこれらの諸課題について、外面的視野だけでなく、内面的に各分野から掘りさげて、矛盾点を指摘し、理論と見解を展開している。

2. 本書の構成と内容

本書は、わが国における港湾研究の体系的な学問系譜である港湾研究シリーズの一つとして発刊されており、各章の構成と執筆者は次のとおりとなっている。(敬称略)

- 第1章 港湾流通と国民経済 (北見俊郎)
- 第2章 港湾流通と市民経済 (柴田悦子)
- 第3章 港湾流通と港湾産業の変革 (喜多村昌次郎)
- 第4章 港湾流通と労働問題 (徳田欣次)
- 第5章 港湾における物的流通革新と港湾の経営 (山本和夫)
- 第6章 港湾流通と港湾行政 (和泉雄三)
- 第7章 港湾流通と制度的問題 (河越重任)

第8章 港湾機能と情報コミュニケーションの基本的諸問題（荒木智穂）

第9章 港湾流通の構造的変化と今後の課題（山村学）

以上の各章は、それぞれ9人の著者により分担執筆されている。その内容を各章ごとに要約して、次に紹介してみよう。

第1章では、国民経済と流通をめぐる問題意識をとりあげ、発展した国民経済の政策的な立場においては、生産が本格的な課題であり、消費は生産のため問題とされ、流通は両者の相対的な調節のために政策的に重要な役割をになうものであると論じている。また、港湾は資本主義経済の運動法則の一環として国民経済の再生産の過程における開かれた機能をもつことが前提であるとし、港湾流通をして、それを具体化せしめうる人と組織、資本と労働に関する港湾独自の経済、社会的な諸条件について論述しており、さらに流通面の事情を考慮せず生産が先行した国民経済の体質が港湾流通における問題点を惹起していると指摘し、国民経済と港湾経済の平等の立場保持が港湾に正しい流通の役割を演ぜしめるものであると論及している。

第2章では、大都市及びその周辺の港湾は都市経済に直接関係のある貨物、食料品、原材料等の取扱が多く、その貨物の内容からみて、市民経済と強い結びつきを有していると述べており、一方、臨海工業地帯では巨大工業港が建設されることによって、コンビナートの生産活動が活発化し、港湾貨物に直接かかわりのない周辺住民が公害を被らむている事実を指摘している。また、港湾流通貨物の自動車輸送への依存度が高いことをとりあげ、港湾周辺の道路建設計画が地域住民に及ぼす影響について論じており、さらに流通港湾の整備計画をとりあげ、市民参加による国民生活優先の港湾建設が市民経済発展の前提となると論及している。

第3章では、物流増大と港湾運送ならびに港湾流通における問題点、および港湾施設と港湾運送需要構造の関係について、港湾運送事業の経営規模の中小零細性および二重構造性を中心として述べており、さらに流通費用と港湾体制に関して、ニューヨーク港における事例をあげ、港湾流通の経済的効果は港湾貨物の流通と直接関係する港湾運送の体系、港湾労働力および港湾施設の利用形態が、その目的にしたがって結合、組み合わせられることによって可能となると述べている。そして、港湾流通革新に対する港湾産業の体制変革については、港湾運送市場構造の変化への対応と港湾運送構造の現実的合理性の双方から問題視すべきであり、港湾施設の共用や共同行為による経営規模の拡大、資本集中の実を挙げることが当面の経営的対策であろうと論じている。

第4章では、わが国における港湾労働の前期的低労働条件、労働集約的重層下請構造および日雇依存形態などの特質をとりあげ、それに関する港湾労働体系の変遷ならびに労働の性格の変化を究明しており、さらに輸送革新と港湾労働との関連において、港湾労働をめぐる合理化の背景や輸送体系の変化、輸送革新下における港湾労働の供給構造、港湾労働に対する諸施策の変遷、輸送革新に対応した新しい港運業および港湾労働対策、港湾労働に対する国際的な動きなどについて、経緯と見解を展開している。ま

た、輸送革新と港湾労働組合運動について、その実態の解明、将来展望を行なっており、さらに今後の課題として、日雇労働の常用化、労使関係の近代化、労働の質的变化への対応策としての技術訓練、労働条件の改善などについて論じている。

第5章では、まず、協同一貫輸送における港湾経営の諸問題として、これら新輸送形態の推進者と支配者の関係、および在来港湾におけるその他の関係者の動向を解明し、港湾経営という立場から、その及ぼす影響意義を究明している。また、物資別専用輸送化による港湾経営上の諸問題として、大規模臨海性工業の工場埠頭、全国主要港湾における公共埠頭内立地の荷主産業施設、港湾管理者主導型の物資別専門埠頭の三型態について、具体的内容と見解を述べている。さらに、港湾経営の公共性と経済性について、港湾支配と地域経済支配の相関性、および港湾財政の自主自立性を中心に問題点を指摘し、今後のあり方を論じている。

第6章では、港湾管理行政の総合性、自主性の必要を論じ、さらに、戦後日本港湾行政の特徴として、港湾の施設拡充・機械化が民主主義に基礎を置かず実施されてきたこと、港湾の性格が高港から工業港へと変化し、公害や大工業資本の独善という弊害があらわれてきたこと、港湾業界、労働者への行政施策が貧弱であったことの三つをあげ、港湾修築行政重点主義に対する見解を展開している。また、港湾行政は物的流通のみでなく、商業流通も行政客体とすべきであると主張しており、なお、港湾流通の近代化について、事業者・労働者への指導・監督・助成が行政サイドのみで押し進められた点に限界があると論じている。

第7章では、港湾に立地する経済主体の行為のうち、海上運送物品を対象とする有用効果の生産を行なう船舶荷役作業が港湾の本質的機能であるとしており、港湾における労使関係の定立によるその近代化が船舶荷役にかかわる制度の基本であると述べている。さらに、47年8月運政審報告における輸送革新に対応した新しい港運業とは労働者の団結のみならず基本的人権そのものをも否定したものであるとし、港湾市場においては、労働力のオルガナイザーではなく労働者の団結をもって対応しない限りは、競争原理の機能する余地さえもないと論じている。また、港湾における流通近代化を制度的に保障するものは、物的設備にもまして、労働の組織であると述べている。

第8章では、港湾の原意について、Hafen 又は Port の両語からその歴史の経緯を考究し、商港としての性格と伝統を通して、欧米諸国の主要港湾の都市形成発達過程を述べ、印刷メディアの発達に伴う地域住民の社会コミュニケーション行動の増大を論じており、さらに、商業と情報の相関機能が欧米の港湾都市の発達過程にとって不可欠な条件であったと論及している。なお、ハンブルグ港湾都市の史的背景に基づいて、市民社会全体との関連における情報の役割りの重要性を述べており、また、ヒンターランドと港湾コミュニケーション機能に関して、港湾はわれわれの港湾であるといった都市・地域住民の意識が根強く定着するような性格のものでなければならないと論じている。

第9章では、港湾における流通活動をとおして資本の回転効率を高める必要から、そ

の新しい流通構造への展開は利用者を中心として顕著なあらわれ方をしていると述べており、さらに、特定の巨大資本による港湾の専用的利用が増大化し、しかもその効率的利用による成果がほとんど地域住民に還元されていない点を指摘している。また、港湾流通が地域経済や社会の発展に寄与できるような体制が形成されていないとしており、港湾の合理的な流通機能を形成していくためには、物理的な施設整備に加えて、港湾機能を動かしていく法的制度や行政策が検討されるべきであると論じている。

3. む す び

港湾流通は港湾機能の中核的存在として、複合的であり、多種多岐にわたって各分野と関連しているので、これらの全てにわたって課題を包含し、本質的理論体系を展開することは至難のことであろう。本書はこのような難点を良く克服しており、全章を通じて、それぞれ特定の分野から港湾流通の実態と矛盾点をとりあげ、その理論的解明を積極的に試みている。これは正に画期的なものであると思われるが、その反面、港湾流通を各章とも、各分野との関連において論じており、港湾流通そのものの定義づけなり、本質の検討に主力が注がれていない憾みも見受けられる。

一般的にみて、本書は、輸送革新時代の港湾をめぐる諸問題が量・質ともめまぐるしく変化し多様化している現在、港湾流通の民主的あり方について、参考となる処が大きいものと思われる。(成山堂発行、1974年、A 5判、232頁、定価2,200円)